

他科の先生に  
知って欲しい

## 豆知識・・・皮膚科編⑫

「このキズ、治りますか？」という患者さんの質問に答える  
～創傷のケア・管理について～

赤磐皮膚科形成外科 高橋 義雄



「このキズ、治りますか？」臨床医の先生方にとって、患者さんから最もよく尋ねられ、返答に困るのが、この質問ではないでしょうか。患者さんは、ケガをする前と同じ状態にまで治ると、かたく信じています。落として割れたコップが元通りになるわけがないのに、カラダのキズはすっかり治ってしまうことを期待しています。

今回は皮膚の創傷治癒について解説していきましょう。

創傷には、キズの深さが真皮内にとどまる浅い創傷と、真皮を超えて、軟部組織にまで及ぶ深い創傷とに分けて考える必要があります。創傷の治癒過程は、浅い創傷と深い創傷とではかなり異なるのです。

浅い創傷では、創縁、創底の両方から治癒が進みます。**重要なのは、表皮細胞や、汗腺や毛組織などの付属器の上皮細胞から、「再上皮化」という治癒過程があることです。**浅い創面では、創底からの再上皮化が治癒を促進し、瘢痕の形成を妨げますので、早く治りかつキズあとが目立たずに済むのです。

深い創傷では、まず壊死組織の除去が治癒の大前提になります。その後、肉芽が形成されて陥凹が充填され、肉芽の成熟による創の収縮、創辺縁からの上皮化による創閉鎖という過程をたどります。創周囲の血流も少なく、治療期間が遷延し、醜状瘢痕として治癒することになります。

ポイントは3つ——キズを早く治し、瘢痕を早く成熟させること——

### ① 創の汚染・壊死組織を取り除く…十分な洗浄

先ず行うべきは十分な洗浄です。屋外での転倒や、側溝への転落に伴う汚染の激しい創では、感染の恐れもありますので、一期的な縫合は困難です。初期の洗浄が不十分だと、残存する異物が外傷性刺青となり、醜状瘢痕となってしまいます。深い創傷であれば、壊死組織を除去することが最優先になります。良好な肉芽形成を阻害するバイオフィルムも、洗浄をすることによって、物理的に取り除きます。

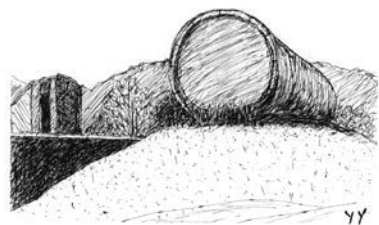
### ② 出来るだけ短期間に、良好な創傷治癒を目指す…トラフェルミンの使用

治療が遷延すると、瘢痕を過剰に形成するきっかけを与えてしまいます。トラフェルミン（フィブラストスプレー<sup>®</sup>）の登場により、創傷や熱傷は、治癒にかかる期間が大幅に短縮し、かつ瘢痕が柔らかく成熟していくので、肥厚性瘢痕やケロイド化のリスクが大幅に減少しました。臨床医の先生方にも是非利用していただきたいと思います。

③ 専門医に紹介する…いつでも構いません

たとえ休日の対応であっても、次の日に専門医に紹介すれば、その時点で二次的な縫合処置や次善策としての適切な処置方法が判断できます。たとえいったん治癒した傷でも、瘢痕のケアを適切にすると、肥厚性瘢痕やケロイド化を防ぎ、最小限のキズあとにしておくことが可能ですので、治癒過程のどの時期でも、専門医に紹介していただければ、より良い創傷治癒につなげて行くことが可能です。

対応に困られるケースがありましたら、専門医にご相談ください。



御津医師会：山中慶人